

ソシュールの言語論、その再定置を試みる

キーワード： 「言語的コミュニケーション」「シーニョ（言語的意味の単位）」
「恣意性と線状性」 「差異の二項対立関係」 「体系と構造」

ー「精神の学¹」としてのソシュールの言語論ー

聖書の創成記において示された言語観、「言語名称目録観」にも拘わらず、ソシュールの言語論は、自らを取り囲む生活世界に対峙する人間が、「差異への気づき」「差異への感興」を覚え、その感興の在り様を己の生活世界から括り取ると表現される、生活世界への「解釈」、それを言語的意味として、音声と共に表象する「言語」といった構成である。

19世紀末葉のジュネーブにおいて、ソシュールは「ラング/言語」「パロール/言語音声」「ランゲージュ/言語能力」の3概念をもって、「言語」の「構造」を示し出している。

人間は「差異への感興」「気づき」をもって「シーニョ/言語的意味」を産ましめ、その連鎖をもって「ディスクール/言述」の達成へと向かう。「シーニョ」は（シニフィアン・音）（シニフィエ・意味）の一体構成であり、その音は聴者に「音響イメージ」を湧出せしめて「意味」の理解へと運び、やがて話者聴者は互いに近似する言語的意味との対比、「二項対立関係」の中から、新たな「シーニョ/言語的意味」を括り出すとする。

ディスクール（言述）達成の渦中で、話者が語る「シーニョ」、その「シニフィアン・音」の揺らぎは、言語の線状性故の「シーニョ」の変容「分節」を現出せしめ、人間は新たな言語的意味の単位「シーニョ」を産ましめ、その地質学的な歴史経過の中から「シーニョ」の格納の装置、「言語の体系」の構築、その深化拡大の過程が想定される。

言語音声（パロール）を聞きあうコミュニケーション過程、話し手聴き手双方の精神機能は恣意に展開し、発語（身体運動）の「線状性」は、「シニフィアン・音」を揺らし、聴者の「音響イメージ」を湧出させつつの互いの言語使用、ランゲージュ（言語能力）の交錯関係が想定される。その記憶を心的格納装置とされる「言語の体系」へと重ねあわせる人間の言語使用において、言語の体系は深化拡大へ、幾万世代を重ねたと想定されよう。

「シーニョ(意味)」を「ディスクール(論述)」へと連ねる言語使用、その渦中で機能する「言語の体系」、その言語使用の記憶、「意識に届く」とは、言語の体系に新たな「シーニョ」を組み込みつつの言語使用、母国語言語体系の社会集団的な構築過程と重なる。

※19世紀の世界が切り開いた「近代的自我」概念、神羅万象を科学的な視点で解明する主体、その意味の単位「シーニョ」、その心的な格納体系「ラング」の想定と理解されよう。

¹ レヴィ＝ストロース/エリボン『遠近の回想』P200 みすず書房 1991年12月25日発行

20 世紀の中庸に至り、レヴィ＝ストロースはアメリカ先住民の神話ストーリーの中の諸変換（転喻・換喻・反転等）の在り様、その変換の形式、類型を示し出し、それらはソシュールの言語論における「恣意性」の展開過程と互いに重なり合い、その共通性を示し出す膨大な記録と考察、『神話論理全 4 巻』の読み解きを展開している。

「ソシュールの言語論」の言語表象、その人間活動、その身体運動（線状性）と精神運動（恣意性）を重ね合う展開過程は、言語使用において「恣意性」として示された人間の精神運動の動態として、レヴィ＝ストロースの『神話論理』における変換の諸相に重なりあい、その互いの同質性において、レヴィ＝ストロースは「啓示を得た」との表現である。

「神話論理」を生み出したアメリカ先住民の精神機能の動態・思考の流れは、ソシュールの言語論における「恣意性」と重なり合い、生活世界に対峙して気付かれた「差異への感興」を産み出しつつ、「差異ゆえの亀裂をめぐる調停」「差異の二項対立関係」をもって、人間の精神活動の展開過程、恣意なる動態として、「シーニョ(言語的意味)」の格納様式(言語の体系)との同調性を示し出している。

人間の精神は自らを取り巻く生活世界に対峙し「差異への感興」を抱え、その「感興」は言語的意味の単位「シーニョ」へ、そして更なる「二項対立関係」を構成し、発声過程の線状性の干渉の中で、「音」と「意味」を揺らがせつつ、更なる重ね合い、「線状性と恣意性」が揺らし合う言語使用の動態が辿られる。母国語集団の精神機能の動態、重ね合いつつ新たな「シーニョ」へと至る言語の体系の構築、深化の過程が想定されている。

言語の「体系」は、人間の心的、あるいは脳機能への『言語的意味』の格納・その記憶の様式でありつつ、人間のコミュニケーション過程において、「恣意」なる精神の動態に沿って「言語的意味」の量的拡大を産みだし、それらを記憶しつつ、揺れ動く意味、現出する観念事象の総体を覆い、広がりつつの経過を抱えている。そしてそれ故に人間社会が、やがて抱えた「不平等問題」の全て、その構造を抱えつつ、人間の精神の動態に沿って展開を続けていると想定されよう。

「それは元に戻る事はできないのであり、消す事のできない変化、刻まれた差異のあちらとこちら側双方を対峙させる二項対立を、さまざまにアナロジーを重ね、媒介項、中間項をつくり、あるいは対立する二つの両義的な意味を具有する媒介項（蜜や灰）を関与させて、差異、亀裂の縮約を図ってゆく」、その精神の動態は、人間の言語使用の在り様に重なる。

ソシュールは 19 世紀末葉のジュネーブで、音素を基礎単位とする言語的意味の単位「シーニョ」の記号的構成、その「音」と「意味」の一体性を示している。音声言語は話者/聴者互いのパロール(言語音声)を重ね合い、母国語集団的な言語コミュニケーションを産み出し、その地質学的歴史経過から、各「母国語体系」の構築、敷衍の過程を産み出している。

序：人類の言語使用

ソシュールはスイスのフランス語圏、ジュネーブの貴族であり、その一族は代々優秀な各分野の学者を輩出しているという。その言語論は「実体概念から関係概念へ」とされる現代思想の始まりを画し、ギリシャ以来の言語観、言語名称目録論を覆している。

私は、主に丸山圭三郎（フランス語学者、哲学者）の『ソシュールの思想』（1988年）『ソシュールを読む』（2009年）を通して、言語体系の構築過程について、母国語集団における「時間性と集団性」を軸に、「ソシュールの言語論」を読み込んでゆきたい。

ソシュール（1857/11/26-1913/02/22）は、人間の言語能力（ランゲージュ）を想定し、その実践課程としての言語音声（パロール）、そのパロールがディスクール（言述）へと実働化、意味を表象して聞き取られるという構成を示している。「ラング」はその実働化に係るコードとして、ランゲージュが顕現せしめる母国語言語の「体系」とされる。

言語表象の場で、話し手と聴き手のコミュニケーションを可能ならしめる人間の言語、その場の精神運動と発語運動、その動態について、言語の表象側と受け手側のランゲージュ（言語能力）の重ね合い、その経過を想定し、その要諦、その開始点というべき、ソシュールの示した「差異の二項対立関係」、「差異と対立」、その気づき（感興）、それらを重ね合う構成になる言語使用、その中で機能する「言語の体系」が想定されている。

言語表象側・言語聴取側が双方向的に重ね合うランゲージュの駆動、その母国語集団的な重合状態の中で、「ラングの体系」の構築過程が浸透し、その渦中で、人類は「言語の体系」の通時変換を、地質学的な歴史過程において共時変換を産み出しつつ、言語的コミュニケーションの質的深化拡大を進めつつ、身体的には二足歩行の安定、大脳容量の増大を、そして集団生活の拡大、集団性の浸透、文化の展開過程を産み出したとして想定されよう。

言語使用は人間個々が当面する外界の風土、そして歴史の偶然性の中で、多様な各母国語言語体系（文化）を産みだしつつ、夫々の言語はその体系を構築している。

言語的コミュニケーション能力、音声言語の獲得の中から、人間はパロール（音声表象）の重ね合いをもって、言語的意味の単位「シーニョ」を産みだしつつ、その格納庫たる言語（ランのグ）体系を心的、あるいは脳機能内に醸成しつつ、地質学的な歴史経過を生き抜いたのであろう。その音声言語表象の重ね合い、音声表象する者と聞く者達の相互関係、ポリフォニー的な流れ、その地質学的歴史時間において、人間は音声言語コミュニケーションを交わしつつ、各母国語言語体系の構築を進め、人間集団の形成、拡大、その深化拡大を果たしたと思われる。地質学的歴史経過において、社会の形成を果たしつつ、21世紀の生存を続けている人類ではないだろうか。

1. ソシュールの言語論

① 人間の言語使用について

ソシュールが言語論を書き記した時代（19 世紀後半）は、1859 年にダーウィンの進化論、「種の起源」が発表され、言語学においても「歴史言語学」が盛隆となった時代である。各言語が歴史的、地理的に伝播してゆく言語として、その系統、分布状態を踏まえた、インドヨーロッパ語の歴史的な伝播、展開過程が中心的なテーマとなっていた時代であった。

ソシュールはその中で人間の言語能力(ランガージュ)と言語表象/言語音声(パロール)、そして言語的意味の単位(シーニョ)を措定し、人間が言語を使用する意識作用、その使用の記憶として、「シーニョ」を脳内に記憶する装置、(ラングの体系)をもって、その言語論を展開している。

言語(ラング)について、「体系」と「構造」と言う二つの「概念」が示され、通時変換、共時変換を措定し、言語的コミュニケーションを可能ならしめる話者/聴者に共通な言語の体系、そしてそれを構成する「シーニョ・言語的意味の単位」の定義、その「音と意味」の一体性、そして新たな言語的意味の生成、変容の過程を含意する言語論を展開している。

人間は自らの「差異の感興」を抱えて音声表象(パロール)を成し、その場面での話者/聴者は互いに呼応し、それぞれの「差異の感興」を、やがては概念化へと至らしめる人間の言語的コミュニケーション過程、言語的意味の生成過程、その展開が想定されている。

言語音声の集団的な浸透過程、その記憶の体系と言うべき「言語の体系」、その構成において、集団的な音声言語体系「ラング」の生成と拡大深化の過程、「母国語言語」の集団的敷衍、その経過が想定されている。

話者/聴者において、生成されつつ、変換されつつの「言語」の体系性、その「体系」のベースにある「構造」と言う新しい概念をうみだしたソシュールの言語論である。

i) 『言語論講義』

ソシュールの言語論は、1906 年から 1911 年までジュネーブ大学で行われた言語論講義(第一～第三講義迄)の内容を、没翌年 1916 年に、聴講生達のノートをもとに「言語論講義」として出版されている。更に戦後になって、1954 年頃から、新たな講義資料がジュネーブ公共大学図書館で相次いで発見され、1957 年にゴデルが『一般言語学講義の原資料』を、1968 年にはエングラールが『一般言語学講義』改訂版をそれぞれ刊行している。

ソシュールの三回の講義はそれぞれが未完に終わっており、最後の第三講義には「コトバの哲学的講義」「力動的記号学」の講義が予定されていたという。('神話・アナグラム'の

ノートが予定されていたという。)

ii) 「エピステモロジック」な展開

ソシュールは、それまでの西洋社会の伝統的な言語観、ギリシャ以来の、あるいは聖書の記述の中の言語名称目録観を覆し、ヘルダー (1744-1803) の神ならぬ人間による言語起源論を経た 19 世紀の末葉に、それまで「ラング・言語」とされていた中から、新たな概念「ランゲージュ (言語能力)」・「パロール (言語音声)」を創出し、さらに言語音声 (シニフィアン) と言語的意味を (シニフィエ) の一体的構成である言語の意味の単位「シーニョ」を措定している。

ソシュールの言語論において、人間の言語的コミュニケーションは、言語的意味の単位「シーニョ」の連鎖をもって「ディスクール・言述」を達成し、意味を伝え合うという、その構成が示されている。「シーニョ・言語的意味の単位」は、言語音声の単位『音素』の一線状の配列関係であり、言語を使用する話者/聴者のランゲージュ (言語能力) の交錯関係において、その発する「パロール・言語音声」の連鎖、ディスクールの達成において、互いの意味理解へと至る構造、人間の言語的コミュニケーションが示されている。

「パロール・言語音声」の連鎖としての言語使用、「パロール」を構成する言語的意味の単位「シーニョ」、その連鎖は、話者の側の言語音声の単位「音素」の一筋の連鎖 (線状) であり、聴者の側は、その「シーニョ」の各「音素」の線状的な連鎖が湧出する「音響イメージ」を抱き、話者/聴者互いのランゲージュを重ね合わせつつの言語使用、言語的コミュニケーションの展開過程が示される。

その言語使用の経過、その記憶は、やがて脳機能への関与において、人間の言語使用の長き経過において、人間における「ラングの体系」の拡大深化を齎しつつ、言語使用の地質学的経過が想定されよう。

言語は、人間生活を取り巻く各事物の名称目録ではなく、人間の心的動態、母国語集団が構築した、自らの生活世界への「解釈」、その地質学的歴史過程で育まれた、人間の「思考の体系」として理解されよう。

iii) 「シーニョ」の連鎖としてのディスクール

言語的意味の単位「シーニョ」は、シニフィアン (言語音声)・シニフィエ (言語的意味) の一体的な構成とされ、言語使用を進める人間の意識作用「ランゲージュ」が、その場で、音声言語の実践課程としての「シーニョ」の連鎖、その「パロール・言語音声」をもって、ディスクールの達成へと至るとされる。人間が妥当な「シーニョ」を選び出す場面で、言語使用の記憶に係る「ラングの体系」であり、その三者 (ランゲージュ・パロール・ラング) の交錯としての言語の使用を示し出したところの、シュールの「言語論」と理解されよう。

人間は互いの言語音声によるコミュニケーションの深化拡大の中で、幾世代を重ねつつ、言語使用に係る精神機能の深化/拡大を達成しつつ、永き歴史過程を生き続けている。

「シーニョ」を選び出し一線状に連ねる精神運動の重ね合い、身体運動としての発語・発声機能の展開、その双方の重合としての音声言語使用、人間の言語活動の地質学的歴史時間の経過の中から、「言語の体系」の構築過程を重ねたものと想定されよう。

人間の言語的コミュニケーション、その経過が育んだ人間相互の関係性構築につれて、人間は家族をなし、集団生活へ、社会生活へと、歴史時間を経過したものと想定されよう。

② トルベツコイによる「音素」概念

ソシュールの言語論において、言語的コミュニケーション、音声言語使用の動態は、トルベツコイによる言語音声の構成単位である「音素」の定義(1938年)を得て、「シーニョ」の記号構成の根拠が示されたと言えよう。『音素』の連鎖としての「シーニョ」、その線状的な構成をもってディスクールを達成する言語使用、ソシュールの言語記号論は、時代を先駆ける思想として、言語論のベースを提示しているといえよう。

i) 「音素」概念

音声言語を使用する人間のコミュニケーション過程、その場での「ディスクール」の達成は、音素の連鎖、その流れとして進行し、言語使用の場における人間の精神機能と発声運動(身体運動)重合構造と言えよう。

音素の配列構造としての言語的意味の単位「シーニョ」、その連鎖、音素の配列関係の交錯をなす人間の言語使用、話者/聴者、あるいは集団的な言語音声の重ね合わせとしての、言語的意味の共有過程が想定されている。その構成をもつての言語音声(パロール)・言語能力(ランガージュ)・言語使用の記憶の体系としての言語(ラング)であり、その三者の構成をもってソシュールの言語論は展開している。

言語音声の基本単位「音素」、その定義はおそらくはソシュールにおける音素のイメージを念頭に、トルベツコイが『音韻論の原理』Grundzüge der Phonologie(1939)において詳細に定義、展開している。トルベツコイは革命期のロシアからの移動を経て、ナチスドイツ時代のウィーンで没しており、没後に出版されたのが主著『音韻論の原理』である。

ii) ソシュールの予感あるいは前提

ソシュールは19世紀末葉のジュネーブで、あたかも「音素概念」を前提にしての言語論を展開している。その言語論から半世紀ほど経過して、ロシアの貴族であったトルベツコイの「音韻論」が世に出る訳である。「シーニョ」の線状的な連鎖としてのディスクール、その「シーニョ」の言語音声「シニフィエ」は、言語音の基本単位「音素」の線状的な配列関係

としての構成を示しており、その「音素」についての詳細な定義がなされている。

ソシュールの言語論は、人間の言語能力を「ランゲージュ」として想定し、言語使用の実践課程としての（パロール・言語音声）であり、（パロール・言語音声）は「シーニョ」とされる言語的意味の単位の線状的な連鎖（言語の線状性の定義）であり、言語使用の記憶として、各「シーニョ」を格納するという表現になる「ラング」である。

この三概念を軸にする言語論の展開において、言語音声「パロール」は言語的意味の単位「シーニョ」の連鎖として想定され、その「シーニョ」は言語音声の基本単位「音素」の連鎖であり、その『音素』概念が「音韻論」として詳細に示された訳である。

iii) プラハ音韻学派とトルベツコイの音韻論

ソシュールの言語論、その視点に確かな根拠を与えた「トルベツコイの音韻論の原理 (Grundzüge der Phonologie) (1939 年)」は、彼の没後に出版されている。言語音声の物理的側面を記述する音声学ではなく、言語における音の機能面に焦点を当てた「音韻論」とされ、人間が、聴覚機能において反応し、捕捉可能な範囲の「音声」は、物理的な「音」に対して、ある限定性を有するとの展開である。

※「音韻論の原理 (Grundzüge der Phonologie) (1939 年)」：ヤコブソン、ファン、ハレが 1952 年に発表した『音韻分析の準備段階 (Preliminaries to Speech Analysis)』で提唱され、その後の生成音韻論の発展に大きな影響を与えており、ソシュールの言語論の『音素概念』を裏付けている。

「トルベツコイの没後に発刊され、個別言語の音韻分析の具体的手順を示すとともに、音素、音韻的対立、相関関係、弁別特徴、有標・無標等の概念、また約 200 に及ぶ諸言語の分析に基づく音韻体系の類型などについて詳述している。」(コトバンク・ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典)」

トルベツコイはロシア革命後にロシアからヨーロッパに移動し、ウィーン大学教授へ、そして R・ヤコブソンらのプラハ言語学サークル (プラハ音韻学派) に参加して活動し、「F.ソシュール、J・ボードアン・ド・クルトネー (1845/313-1929/1103)」らの思想を批判的に継承して、言語の機能と体系を基盤とする構造主義音韻論の方法を確立した」とされている。

ヤコブソンと共にプラハ言語学派の中心的なメンバーとされるトルベツコイであり、「音韻論の根底的テーゼを定義するときに、次のソシュールの古典的な命題の引用に如くものは無い」として、『シーニョ』を構成する基本単位としての『音素』について、「何よりもまず対立的、関係的、そして否定的な本質体である。」としている。(「子音の音韻音的分類に

関する考察」1938年」²)

しかしナチスドイツの勃興の時代を迎え、ユダヤ系の知識人達は米国亡命へと向かう時代を迎え、亡命中の米国の自由高等研究院の講師同志として出会い親交を深めたレヴィストロースとヤコブソンであり、ヤコブソンは「トルベツコイの音韻論」をレヴィ＝ストロースに伝えており、それが『野生の思考』『神話論理 4巻』に繋がっている。

iv) 言語使用：話者と聴者・

人間の言語使用は、話者が言語的意味の単位「シーニョ」の配列関係を構成して、ディスクールを達成し、その話者のディスクール達成課程に対峙して、聴者の側は自身の「ランゲージュ」を重ね合わせ、言語的意味を聞き取りつつの、互いのディスクールの共有過程、言語的コミュニケーション課程が想定されよう。

話者の側が構成する「シーニョ」の連鎖がディスクールの達成へと向かう、その渦中で各「シーニョ」は、その抱える意味をもって選ばれつつ、発語されつつ、「音素」の一線状の配列関係を構成しつつ、ディスクールを構成する。

聴者の側は、話者の発する「シーニョ」の「音素の配列関係」に沿って聴き取りつつ、聴覚機能と精神機能を連動せしめ「音響イメージ」を湧出しつつ、自身の「ランゲージュ」において、意味理解を進める。そうした相互のディスクールの達成課程は、時の経過に追われつつの「線状性」をもって進行する。

話者/聴者の相互的な言語使用において、ディスクールの達成へと向かう話者の言語使用の経過、その精神機能と身体運動（発語運動）に対して、それを聞きとり理解する聴者側の聴覚機能と精神機能、その連動重合過程において、話者/聴者の間の言語的コミュニケーション過程、動態が想定されよう。その経過が、言語を使用する人間集団において、集団的な動態を構成しつつ、長き地質学的歴史時間の経過を経て、それらを通しての人間社会の言語の体系の形成過程が想定されよう。

v) ディスクールの達成における「シーニョ」と「音素」

言語的意味の単位「シーニョ」は「音・シニフィアン」と「意味・シニフィエ」が一体的に結合しているとされ、「音素の配列関係」「シニフィアン」の配列関係の差異をもって「音響イメージ」を湧出する。

² 丸山圭三郎 『ソシュールを読む』 P72 岩波セミナーブックス2 2009年3月13日

言語使用に際して音素の線状的な配列関係、「シーニョ」を繰る人間の意識作用「ランガージュ」は、発語過程、聴取過程、意味理解の実践課程を進める「言語能力」として想定される。その「ランガージュ」は、時間的な制約（線状性）の中で進行する発声過程において、音素の配列関係の連鎖としての言語音声（パロール）、『音素』の線状的配列関係を構成して、ディスクールの達成へと動く、人間の精神機能として想定されよう。

話者・聴者の間の言語的コミュニケーションの過程において、その場で発せられる言語音声は、ディスクールの達成へとむかう「シーニョ」の連鎖としての構成であり、「音素を基本単位とする記号的構成」を成している。

「音素」の連鎖としての構成、記号的構成を成す言語音声であり、話者/聴者の言語使用の過程は、音声言語使用として、「音素」の線状的な配列関係の構成であり、それはパロールの流れとして、時の経過、時の流れに追われつつの、「シーニョ」の連鎖の達成過程、ディスクールの達成へむけての、「言語的意味」を選びつつの言語使用、創造過程と言えよう。

③ 言語的コミュニケーション

i) 言語的な意味理解

言語音声「パロール」を構成する話者の側の「ランガージュ」の駆動、そしてその「パロール」を聞きとり意味理解へ至る聴者の側の「ランガージュ」の駆動、両者の重ね合いが想定される。話者の側は発語運動を、それに対して聴者側は聴覚作用を通して、双方が言語音声、「シーニョ」の連鎖をもって、ディスクールの達成へと向かう、双方の重合的なランガージュの駆動の経過が想定されよう。

言語的コミュニケーションに及ぶ一方の当事者「発語側」において、その発声、発語運動に係る精神活動に対して、「聴者側」においての聴取活動から意味理解への精神活動の流れ、その双方の展開は音素の配列関係と言う記号的構成において、揺れ動く「意味」の幅を抱えつつ、時々刻々を刻む展開として、音素の配列関係という記号的構成故の、言語的意味の揺れ合い、あるいは「蓋然性」を抱えつつの展開として想定されよう。

話者が妥当する「シーニョ」を選びつつ、ディスクールの達成へと向かう場面で、聴者側は話者が発語する「シーニョ」への意味理解、「音響イメージ」とされる聴覚機能と精神機能の重なり合いとして達成する「意味理解」が想定される。それはソシュールが喝破した「記号としての言語の構成」の故に、意味理解の重なり合い、互いの揺れ合いが想定される意味理解への道程、その達成へと、その経過を含みつつ進行するものと想定されよう。

この経過は話者側の発語過程と精神機能の重合、聴者側の聴覚機能と精神機能の重合と

いう、両サイドの相互的総合をもって、話者聴者互いの言語的コミュニケーションの達成へと至らしめる「シーニョ」の記号構成の効果、意味理解への揺れ、その幅を抱えつつの流れとして理解されよう。

ii) 脳機能との関係

話者の「パロール・言語音声」の発声過程において、各「シーニョ」の配列関係を構成してディスクールの達成へと向かいつつ、その渦中で「シーニョ」の「意味（シニフィエ）」において、二項対立的な構成を通して、妥当する「シーニョ」を選びつつ、ディスクールの達成へと動く、ランゲージュ（言語能力）の動態が想定されよう。

そしてそれら発語の経過は、線状性とされる時の流れに沿う、一筋の音素の流れとしての構成を要請されつつの進行と言えよう。

聴者の側は、話者の発する「パロール」、「言語的意味の単位」の連鎖、音素の配列関係において、その音声を「シーニョ」として括り出し（言語的意味に重ね）、自身のランゲージュにおいて意味理解を進める言語使用として、双方の精神機能の動態が想定されよう。

人間は言語使用の記憶を重ねつつ、言語活動に係る精神運動の動態（脳機能の関与）、恣意なる動態に対して、発声運動という身体運動の動態、時の流れに追われつつの一線状に連ねる音素の配列関係を重ねあわせつつ、話者/聴者のランゲージュ（言語能力）の交錯、そうした母国語集団的な言語使用の永い歴史経過が想定されよう。

その経過をもって、人間はやがて、それぞれの言語使用において、慣れ親しんだ「シーニョ」において、母国語集団的な言語使用の重ね合い、その記憶の体系としての「ラングの体系」を脳機能に刻みつつ、あるいは刷り込みつつの、母国語集団的な音声言語使用、コミュニケーションの展開の歴史過程が想定されよう。

iii) 音素配列と「聞こえ度」について

人間の言語音声は、音素の線状的配列関係をなす「言語的意味の単位・シーニョ」の連鎖であり、言語音声の基本単位「音素」の線状的列関係として進行し、音素の配列関係がもたらす聴覚的映像、「音響イメージ」として、聴者の側が聞き取りつつ、湧出しつつの、話者/聴者互いの聴覚機能と精神機能と発語運動の重なり合いが想定されよう。

そこで言語的コミュニケーションは、言語の記号的構成故に、人間の意識作用の恣意なる展開過程、その揺れから生じる無限的な言語的意味をも、湧出可能な構成、音素の配列関係を成すものと理解される。それは音声言語の使用過程において、脳機能への記憶をインプットする、一つの「音素の配列集合」を「音響イメージ」として（on/off）と言うシンプルな情報処理に乗り得る形式を構成しつつ、その反応形式が、言語使用の深化拡大に伴う脳機能の進化の過程を齎し得たと想定される。

人間の聴覚機能と精神機能の重層的な動態としての言語使用、発語側の精神機能と発語運動の連動関係、聴取側の「音響イメージ」の展開、その双方の時を刻みつつの重合的な構造において、人間の言語的意味理解に至る、話者/聴者互いの言語音声の把握、意味理解、ランゲージュ・言語能力が駆動しあう、言語的コミュニケーションの過程が想定されよう。

聴覚機能が言語音を「シーニョ」として聞き分ける経過は、物理音への反応としてではなく、言語音として聞く力、「聞こえ度」という表現があり、その事が示している事は、物理音の相違、その平行移動ではなく、何だかの聞き取る側の人間において、選択性が伺われるようである。その選択性は、各母国語集団的な風土、生活場面でのエピソード等、偶然性にも規定されつつであろうか、恣意であり得るのであろう。

※google 検索：『「音素配列」と「聞こえ度」の関係は、音節内の音声の順番を、音声の聞こえ度（sonority）の高さに基づいて決定する音素配列法則にあります。この法則では、音節の核となる母音に向かって聞こえ度が高まり、母音から離れるにつれて低くなるという基本的な構造を持ちます。この原理は、異なる言語の音節構造を説明する上で役立ちます。』

人間の聴覚機能と精神機能の重層的な動態としての言語音の把握、言語音を構成する音素、その配列関係の差異をもって、意味理解を進める、その重合的な構造において、聴者側の言語的意味理解が進み、話者側のディスクリートの達成を迫りかける。それは互いに言語的意味の創出（使用）過程でありつつの、言語的コミュニケーション過程としての言語使用として理解されよう。

④ 形相と実質

i) 「物理音としての「音」と言語音声 (speech sound)」

「物理音」と「言語音」、その両者に対する人間の感性、聴覚機能の反応については、「ある違い」があり、人間が言語使用に際して、聞き分け合い、発声し合う精神機能、脳機能の活動態は、それぞれの物理音を言語音声として、どのように聞き出すのか、それは各母国語の体系、音韻的特徴によって異なるとされる。

トルベツコイが定義的に明らかにした「音素」は、それを聞き取る側の母国語の違いにより、人間の聴覚機能が把握可能な言語音声的な刺激、その刺激を成す「音素配列」への感度、あるいは言語音の差異の把握において、それぞれの識別構造において、一律に各言語集団において共通とは限らずに、いわばバリエーションが想定されるようである。

更に複数の音素の組み合わせという、隣接して配列される音素集合のもたらす「感興」、響き合いの差異もあり得て、言語音声が人間に覚知される枠組みには、多様性も想定され、それが各母国語言語のさまざまへの流れを規定する理由として想定されるのであろうか。

物理音としての音の把握に係る聴覚機能と、言語音の把握に係る聴き取り機能、人間の言語音を聞き分ける能力には、その感度の相違として、**音声学的** (phonetic) な方法と**音韻論的** (phonological) な方法の二つが指摘されていると言う。

音声学的な記述方法は、分節音が持つ特徴を物理的な側面から観察し記述するが、音韻論的な記述方法は、分節音が他の分節音と異なるかどうか、つまり音の違いがその言語の母語話者にとって意味の違いをもたらすか否かという、分節音の機能が問題になるという。この機能は音素の配列の様態、音素同士の組み合わせにもより、違いが生じる事も知られている。

ii) 言語的コミュニケーションの流れ

言語使用の動態について、言語の発語側は「音素」を単位とする記号的構成の「シーニョ」を、ディスクールへ向けて繋ぐ、その経過において、一線状の『音素の線状的配列関係』の創造過程が進行する。

相対する聴者側は、精神機能「ランゲージュ・言語能力」を発動しつつ、発語者側の発する「シーニョ」の音素の線状的配列関係を追いつつ、「音響イメージ」として繋ぎつつ意味理解へ、ディスクールへの理解を達成する。

その相互的な言語使用において、聴者側は、話者により発語された音素配列を聞き取り、自身のランゲージュを稼働しつつ、音響を受け取りつつ、「音響イメージ」を湧出させつつ、発語された言語音声の「意味理解」をすすめると想定されよう。

その言語的意味に応じて、自身の側からの対応関係として、「ランゲージュ」をもって意味を抱える言語音を発声、発動しつつ、対応するディスクールの構成を進行せしめる。そうした対話関係、言語的コミュニケーション関係、その話し手聴き手双方の言語能力（ランゲージュ）の動態、重合構造が想定されよう。

iii) 分節について（形相と実態について）

この相互的な経過において、言語音声の指し示す「事」は、人間の観念のありよう、解釈を通した意味理解、その生み出したイメージ「心象」として理解される。その心象風景と言うべきか、人間の観念を通して理解された、あるいは想定された外界の描写は、実態、実像とされる「事」に対して、何だかの差異を含みつつ、抱えつつのイメージと想定されようが、その「心象」的な事柄総体についてを、ソシユールは「形相」としていると理解されよう。

そこで話者/聴者双方のコミュニケーション過程における言語的意味の交わり合い関係は、話者のディスクールを聴者の側が共有する過程において、「意味理解」と表現されよう。その「意味理解」は、人間の観念作用、言語的世界において表象されたところの、**「形相」と言うべきか、そうした対象世界において、聴者の側の「解釈」が進行すると理解される。**

実体ならざる形相であるがゆえに、「シーニョ」の連鎖としての「ディスクール」の達成もまた、言語表象における人間の観念による解釈として、いわば幅のある「解釈」の展開として理解されよう。

「シーニョ・言語的意味の単位」は互いに配列されつつ、互いを構成する「音素の線状的な配列関係」の連鎖として進行しつつ、しかしながらその意味の単位「シーニョ」の「音・シニフィアン」、互いの音素配列関係は、その境界を揺らしつつ、変容過程を生じせしめる場面をも惹起しうる構成である。

従って言語音声は、線状性をもって、次々に「シーニョ」を繋いでゆく、その渦中において「分節」とされる動態、「シーニョ」の音素配列の境界線の揺らし合いを惹起すると想定されており、その経過において、「シーニョ」の増殖が生起し、その過程が進行する事が想定されている。それは、音声言語使用における、話者/聴者のランゲージュの重合構造において、言語的意味「シーニョ」の増殖過程として理解されよう。

iv) 言語的コミュニケーション能力の敷衍

言語的コミュニケーション過程において、人間の言語理解に係る「ランゲージュ・言語能力」は、話者/聴者の相互的關係において、個体を越えた会話的な能力、共通能力への要請、その実現としての言語能力の涵養、集団的な人類種としての特殊能力を、そして音声言語体系の醸成を齎したものと想定されよう。

音素の線状的な配列関係を構成する言語使用でありつつ、話者/聴者におけるコミュニケーションには、それぞれの言語的意味の理解の幅を許容しつつ、蓋然性、妥当性、集団的な幅を抱えつつ進行可能ならしめ、コミュニケーション過程を進行せしめる、記号的構成になる言語使用の在り様、あるいは効果として想定される。

形相と実質： 実質の世界を自然界とすれば、形相は人間の視点・観点によって創られる文化の世界、あるいは人間の観念がつくりあげるすべてといえよう。人間の観念作用が産み出す全ての想定、その展開は形相であり、実質と言うべき物的世界に対して、人間の観念が描き出す事柄の全てとして、ソシュールの言語論は展開する。

分節 線状的に連なる「音素の配列関係」である言語的意味の単位「シーニョ」だが、音や意味の単位に区切ることが「分節」と表現されている。

言語の意味は言語音声の配列関係において意味を抱える記号的な構成であり、その配列関係、線状的に連なる音素の連鎖である「シーニョ」、その連鎖に分割状態が生じると、新たな「意味の単位」としての「シーニョ」の誕生の契機を抱え、その分割を「シーニョ」の分節と表現する。音の連鎖としての「シーニョ・シニフィアン」に、新たな区切りを生じる事。

実体ならざる人間の観念世界の表象としての言語表象の動態であり、対象世界はいわば「形相」の故に分節線（言語的意味の単位「シーニョ」の境界線）の揺らぎを現出し、新たな「シーニョ」の生成過程を惹起せざるを得ない構成にあると理解されよう。その経過において、言語的コミュニケーションの浸透は、人間における言語能力の涵養と同値であろう。

2. 新たな「シーニョ」の誕生過程

① 文節言語

i) 時の流れと『分節』

言語的コミュニケーションの場の、交錯する話者/聴者のランゲージュの駆動状態において、話者は「時の流れ」に追われつつ、言語の線状性をもった発語過程であり、音素配列を進めつつの場において、各「シーニョ」境界線（分節線）は交錯し、各「シーニョ」互いの境界線の移動、新たな「シーニョ」の誕生の契機が想定される。

その「新たな意味」「シーニョ」の生成への動きは、そもそもが（実体ならざる）現前として、人間の側の解釈、「音響イメージ」、それは「形相」「観念の産物」の表象、人間の観念世界が産み出した「イメージ」として、「シーニョ」を構成する音素配列関係と言えよう。

「シーニョ・言語的意味の単位」は、一纏まりの「音素の配列関係」として、それぞれの境界線の揺らぎ、「分節」の経過が想定されよう。しかしその「分節」の過程において、「シーニョ」は「音」と「意味」の一体構造であるところから、音の揺れは意味の揺れへ、「シニフィエ（意味）」の揺れが想定されざるを得ない。その場での聴者は、その揺れと同調しつつの「音響イメージ」をもって言語意味理解へと向かう、ディスクールの達成過程へと動く「ランゲージュの駆動」が想定されよう。

地質学的な歴史時間の経過において、「言語的意味」は実体ならざる人間の観念が描く外界への認識を表象し、実質ならざる「形相」への認識構造であり、人間の精神機能が描く「音響イメージ」であるところから、言語的意味の単位「シーニョ」の「言語音声・シニフィアン」「言語的意味・シニフィエ」の一体的構成において、「音」の揺れが「意味」の揺れを誘う、音と共に揺れ合う意味の揺れをきたしつつ、「シニフィアン・音」の揺れに伴う「分節」が想定されざるを得ないのであろう。

ii) 言語音声の「線状性」

「シーニョ」は音素の線状的な配列関係である「シニフィアン」において、ディスクールの達成の渦中において、音と共に意味の揺れをきたしつつ、「シーニョ」同志の互いの境界線の揺らぎを現出し、それが新たな言語的意味「シーニョ」を産ましめる契機として想定さ

れる。

そうした新たな「シーニョ」を産ましめつつの言語使用の動態が想定され、時の経過とともに、音声言語の表象過程のゆらぎ、それ故の新たな言語的意味の創出過程が想定されよう。

「形相」と表現される「事」は、人間の観念が産み出した「解釈の総合」であり、そして「シーニョ・言語的意味の単位」において、その「音」と「意味」の一体性において、「音」の揺れは「意味」の揺れをきたしつつ、人間の観念世界「形相」故の恣意なる展開過程において、新たな「シーニョ」の生成過程、「シーニョ」の分岐を産ましめる「分節」が想定されるのであろう。

iii) 分節言語について

ソシュールの言語論は「エピステモロジークな展開」とされ、言語使用の記憶を格納収納する装置として、体系をなしている「言語の体系」あるいは「言語の構造」という視点が提示されている。

言語の体系を脳機能に抱えつつ進行する人間の言語使用が想定され、その「ラング」とされる「言語の体系」は、言語を使用する人間の精神機能（脳機能）、「ランゲージュ」の実践課程としての「パロール」、その地質学的な歴史時間における構築物として理解されよう。

音声言語は、音素を基本単位とする記号的な構成の「シーニョ」の線状的な連鎖であり、その構成の故に、音素の配列関係の揺れにおいて、言語的意味の単位「シーニョ」は、その音響イメージの差異を生じせしめ、新たな言語的意味を創出せしめる契機を抱える構造にあると理解されよう。

この性質は、言語表象が連続的な音声や意味のまとまりとしてのディスクールを、音の単位（音素）や意味の単位（形態素・単語）といった一定の「節（セツ）」に区切って認識を進める、「分節」とされる性質として、音素の連鎖としての「シーニョ」の連鎖として言語的意味、ディスクールを音声表象する分節言語として、その結果として理解されよう。それがマルティネによって定義された「分節言語」という理解、そのもたらす性質、その効果であろう。

※分節言語：連続的な音声や意味の連なりの中から、人間が意味のある単位（音素や形態素、単語など）を区切り取り出して認識・処理する言語の働きや性質。

「二重分節性（double articulation）」：音素（意味を持たない音）を組み合わせる形態素（意味を持つ最小単位）を作り、さらにそれらを組み合わせる文を作るという人間の言語の構造的特徴を指す。

iv) 音声言語の構成

言語音声の構成は、人間の言語使用に係る精神機能の動態に従いつつであろうが、文を単

語に分け、単語を音素に分解できる構造であり、しかしそれであってかつ、その纏まりとしての「シーニョ」は「音響イメージ」を誘発する。「シーニョ」の分岐についても、分岐しうるところの線状の音素配列の構成、その変容過程もまた、新たな「差異の二項対立関係」の構成で括り出すとして理解されよう。

このような、「シーニョ」の音素配列の構成（**音素を基礎単位とする記号的構成**）は、音素の配列の変容の過程が想定され得る構成であり、その交わし合いとしての言語的コミュニケーションが進行する言語使用は、発語される言語音声（パロール）と、それを繰るラングージュの動態の記憶（時の経過）、それらを脳内に抱え得ることを可能ならしめる構成と言えよう。

「言語の体系」「ラング」とは「シーニョ」の格納庫と言うべき機能を果たしつつ、その帰結としての「言語の体系」として理解されよう。

3. 言語記号論

① 19世紀末葉に提示された二つの記号論

パース（米・1839-1914）は、自身とウィリアム・ジェイムズの仕事を区別するため、のちに自分の方法を“プラグマティズム”と命名したとされる、「プラグマチズム」の創始者で、ソシュールと同時期の、米国での「記号論」の提示者である。

パースの記号論について、彼の意味の理論は記号論の成立に貢献したとされており、コンピュータ技術の時代になって、その論述は「情報処理技術(IT)における「記号接地問題」の理論的基盤となっており、「AIや人間が記号と現実の対象をどう関連付けるかを解明するのに役立ちます」と纏められている。

i) パース記号論の特徴

（パースとソシュールは同時期に記号論を提示しているが、全く独立的にそれぞれの議論を展開している。）

- **記号過程の連鎖**: 「ある記号の解釈項は、次の記号の出発点となり、際限なく記号の連鎖が続くことを前提とします。」この**ダイナミックな解釈プロセス**は、ソシュールの理論には見られない特徴」とされる。（解釈項による理解・意味の表象）
- **認識論としての記号論**: パースの記号論について、「人間の認識や思考そのものが記号過程」であるとして、「単なる言葉の分析を超え、知識の生成や探求のあり方を考察する哲学的体系」でもある。
- **プラグマティズム**: パースはプラグマティズム（実用主義）を提唱した哲学者であり、人間の思考の最終的な解釈項が習慣や実際の行動に影響を与えるという考え方で深く結びついていて、その観念が実際にどのような結果をもたらすかによって

初めて意味が明確になると言う、価値判断を進める言語としての展開である。

ii) パースによる記号論の構成



パースの記号論は、記号論全体を俯瞰するにあたり、その記号構成と指し示す事との関係に注目し、3つのカテゴリーが想定され、記号を使用する人間の意識作用について、解釈項としており、上記の図が示されている。

記号の社会的な利用形態を俯瞰しているパースの記号論とされるが、言語記号は下記の3類型すべてを重ね持つ体系として提示している。

アイコン (類似性・相似性を持つ記号) 性：類似性・相似性に気づく記号使用側の意識作用について、対象との因果関係や直接的な接触によって気付く、記号使用側の気付きにおいて、その気付き指し示す、表現する言語の記号性。

インデックス性：言語の体系は社会的に構築された結果としての言語体系だが、インデックス性とは「特定情報を効率的に見つけ出すための目印や基準」「索引」「指標」「指数」と説明される。言語記号の恣意性を重ねつつの言語使用において、結果としてインデックス性の視点で、言語表現を言語の記号性として検討する視点。

シンボル (象徴) 性：対象との間に類似性や物理的接触がなく、社会的な合意や慣習によって成立する記号性。**言語**、文字、数式などについては、記号として使用する人間の選択意志が問題であり、記号の指し示す事からの規定性は自由・恣意とされ、人間の心的動態を負う、象徴的な意味を含意、表象する言語表象。

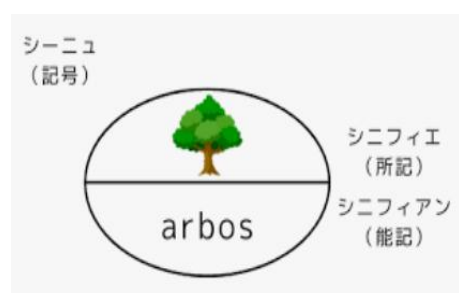
パースの記号論の展開は、「対象」と「現れ」について、より抽象度の高い言語的意味（シンボル性）まで、3類型的分類に及んでいる。そして言語使用、言語記号に限定せずに人間社会の記号的な思考、その敷衍の有りようを捉えており、現在はIT時代に入っており、その俯瞰の全容、議論の範囲は、記号論の全体像を把握するものとして、IT時代の記号構成における意味伝達の進展、情報の階層構造などの議論において機能しており、IT技術の領域で活用されているという。

iii) ソシユールの言語記号論

パースは、記号に拠る概念化作用について 3 類型の整理をしているが、これに対してソシュールの言語論は、言語の恣意性と線状性・形相性・分節・共時変換/通時変換のタームを創出し、言語の意味の単位「シーニョ」を「音素」を単位とする記号的構成として、その「シーニョ」の連鎖としての「ディスクール」の達成、言語の構造に係る記号論としての議論である。パースの記号論における解釈項を持たない構成である。

パースの「解釈項」の措定が意味する事について（ソシュールの言語記号論との比較）

ソシュールの記号論としての言語論の展開において、シーニョの構成は、所記（シニフィエ）と能記（シニフィアン）の 2 項で表されており、言語使用の経過において、その記号構成の「意味」と「音」の変容過程、相互関連性をふくめてサーベイされうる構成といえよう。



上図の、ソシュールの言語的意味（シーニョ）の記号構成に対して、パースにならいあえて解釈項を想定するならば、対象と、母国語集団としての歴史過程を背負い、現在の言語の体系をもってコミュニケーションを交わし合う「母国語言語の体系」を、解釈項として指定されうると理解されよう。その関係は、個人の認識構造、言語使用を進めるランゲージュ、言語の構築過程を背負った母国語集団において流通する「言語の構成・構造」と重なるであろう。

それは解釈項自体は、社会的な共通項、一致点、母国語言語の由来、体系性と一致するであろうから、その解釈項は母国語的な社会性を抱えている所の「言語の体系」と同値と理解されよう。ソシュールの構図は言語論に限定されて構成されているので、解釈項の構成を想定されず、展開をしていると考えられよう。

まとめ

パースの記号論は極めて近代的な理性の働きを体現する 3 概念による構成と理解され、①認知される対象世界・②その対象を記号的に表象する場・対象と記号を使用する側、③それを解釈する側と言う 3 者の区別をもって、記号的な意味理解・表象を把握する。

それに対してソシュールは、対象（シニフィエ）と現れ（シニフィアン）としての整理をもって、解釈項を持たないのだが、それは言語使用を進める人間の精神機能と発語過程において、言語記号「シーニョ」に対しての解釈項は、母国語集団として自明、母国言語表象とする、二者（現れと解釈項）の一体性が前提とされていると理解されよう。

② 記号構成の言語使用と人間

i) (初源の言語使用)

言語的コミュニケーションと表現される場面、その契機として、あるいはその始まりは、原始の人間が、生活を進めつつ、そして環境の変化に対する快不快、恐怖や安堵についての表象、叫び等による情動表象、「差異の感興」への反応などとして、その「感興」なりの共有関係に至る経過を、初源のコミュニケーション過程として想定する。

あるいは他の生物種との生存競争の中であって、生存条件の確保、共有過程、その確保の過程でのコミュニケーション活動として、その為の表現としての機能を抱えての音声表象が想定される。何だかの「差異の感興」を共有する過程において、人間相互の精神活動の共有への過程として、「音声」を媒介にする「叫び」的な言語などが想定されよう。

ii) 記号形式の音声言語

ソシュールが言語の意味の単位として定義したのは、音素の線状的配列関係の単位であり、「音」と「意味」が一体的に結び付いていると表現される「シーニョ」である。ディスクール¹の達成の過程で、「シーニョ」の「音（音素の配列関係）」は揺れをきたし、その音の揺れは意味の揺れを引き起こしつつ、新たな「シーニョ」が生まれ得るとされる。

言語使用をもって、コミュニケーションし、集団的な協働的営為を可能にしたところの、人類の特殊的生態としての言語。その展開と発展は、人間の集団生活、集団を構成しての生存を続ける人間社会を営む、人間の生態の構築過程、その出発点とも想定されよう。

言語表象は、記号形式であるが故に、シンプルな表現形式として、人類の精神活動の進化の過程を負いつつの、コミュニケーション行動であり、意志疎通、人類の共同性の涵養を進め、文明への展開過程を牽引した言語活動と理解されよう。

言語コミュニケーションの場での互いの理解の幅、あるいは深さに相当するものが、パースの解釈項と理解されると思われ、そしてソシュールの言語論における言語の体系性、構造の議論に重なるところの、人間の対象世界認識の構造であり、あるいはその構造を抱えつつの言語の体系といえよう。

言語は記号的構成であり、それは音素の線状的配列関係であるがゆえに、多様な変容を生成可能な形態として、それを解釈する人間の側において幅のある解釈を可能にし、人類種全体に浸透しうるコミュニケーションのためのツールとして、その使用、人間の言語使用能力を拡大深化せしめ得た構成として理解されよう。人類種の繁栄をもたらしたと言える言語の記号的構成、その恣意性、そして言語的コミュニケーションと考える事ができよう。

③ ソシュールの言語記号論

ソシュールの言語論は、言語的な意味の単位（シーニョ）について、記号的構成のシニフィアン（音）と、シニフィエ（意味）の一体的な構成を示し、その連鎖としてのディスクールへの展開をもって、言語的な意味の伝達が叶うという構成である。意味伝達の渦中で、新たな言語的意味、その単位「新たなシーニョ」を生成するということまで、構成している。

i) 音声言語における意味の単位「シーニョ」

ソシュールが言語の意味の単位として定義したのは、音素の線状的配列関係の単位であり、「音」と「意味」が一体的に結び付いていると表現される「シーニョ」である。ディスクール達成の過程で、「シーニョ」の「音」、音素の配列関係は揺れをきたし得て、その音の揺れは「意味の揺れ」を引き起こしつつ、新たな「シーニョ」が生まれ得るとされる。

その経過は「シーニョ」の揺れ、音素配列の揺れ状態をへっていると理解されるが、この状態を「形相」故の揺れとして、実体ならざる人間の観念作用の自由度（恣意性）、あるいは人間の幻影の効果として理解することもできよう。

その揺れは「シーニョ」を構成する音素の線状的な配列関係が「言語的意味」と一体的であるが故に、それぞれの配列関係は、ディスクールの達成へ向けて配列されるにあたり、線状性と言う時間に追われる形の、音素の配列関係を構成する言語表象過程にあって、互いの境界線を揺らしめざるを得ないのであろう。

その境界線のゆらぎを「分節」として、その分節が新しい「シーニョ」、新たな音素配列関係へと、攪乱しつつずれ込みを引き起こすという、「シーニョ」の増殖過程、その動態が想定されている。

ii) 「シーニョ」と分節

言語音声の構成は、その構成単位「音素」の線状的配列関係であり、その音素の配列関係の揺れをきたして、「シーニョ」の変容を進め得るという構造であり、それは「シーニョ」の記号的構成ゆえに生起する。

言語音の発語発声過程は、一生物個体としての人間が発する音声として、線状性の拘束下、時の流れに沿うて流れ、それらを構成する基礎的な単位が『音素』であり、その「音素」の連鎖としての「シーニョ」である。それ故に、言語的意味の単位「シーニョ」の音素配列の揺れ、ずれ等の生起が想定され、それは新たな「シーニョ」への増殖過程を抱えつつの経過として理解される。

人間の観念作用の多方位性あるいは恣意性を背負った言語表象、それは「シーニョ」の増殖過程を産ましめるところの、「シーニョ」の音素配列と言う構成故の揺らぎを抱えつつ、それらの「シーニョ」の変換過程、音素の配列関係の揺れは、その記号的構成の故、その結

果と言えよう。

音声言語は記号的な構成（音素の配列関係）であり、それは音素の線状の配列関係であり、時の流れに従って連鎖を形成しつつ、多様な変容を引き起こし、それを解釈する人間の側に、幅のある解釈をひきだし、その性質故に集団、あるいは人類種全体に浸透しうるコミュニケーションツールとして、その使用に係る人間の言語使用能力を拡大深化せしめ得た特性として、そのように機能した音声言語の性質と考えられよう。

人類種の繁栄をもたらしたと言える言語使用、その記号的構成、その恣意性と線状性、それはすべての生命現象の秩序と同様に、時の流れに沿いつつの流れ、線状性をもつての展開過程として、言語的コミュニケーション過程が理解されよう。

iii) ソシュールにおける音素の予感・・・その証明

前述、音韻論の提唱者であるニコライ・トルベツコイ（N.S. Trubetzkoy）はロシアの貴族であり、ロシア革命、第一次大戦の頃にロシアから出国し、ソフィア大学（1920-1922 年）、ウィーン大学（1922-1938 年）でスラブ言語学の教授に就いており、1920 年代にプラハで設立された「プラハ学派」の主要なメンバーとして、音韻論を広めたヤコブソンらと活躍している。

トルベツコイは、フェルディナン・ド・ソシュールの言語学における、言語音声について「音素」の線状的な配列関係として示している。その没後に出版された『音韻学の原理』（Grundzüge der Phonologie）において、ソシュールの言語論を大きく支え、言語音声の最小の単位「音素」の概念は、言語における「音の規則」を研究する分野としての「音韻論」に、大きく貢献したとされる。

ソシュールの生前には、当然ながらトルベツコイの『音韻論』は発表されておらず（出版は 1938 年）、しかしソシュールの言語論における音素概念の予感、ソシュールにおける言語音声の最小の単位のイメージと重なる『音素』であり、ソシュールは「音素とは何よりもまず対立的、関係的、そして否定的な本質体（アンテイテ）である。」³としており、この規定性の証明といえよう。

参)「分節の恣意性」：ソシュールの言語記号論、「シーニョ」のすべての要素は、相次いで継起し、一つの連鎖を作らざるを得ない・・・（シーニョは、線状の次元、唯一の次元しか持たず、時の経過に於いて展開される）『ソシュールを読む』p 203 「シーニョ」は聴覚的結果として、線状的になる p 203

³ 丸山圭三郎 『ソシュールを読む』 P72 岩波セミナーブックス 2 2009 年 3 月 13 日

人間の観念作用の全てを覆い尽くし、それを表現し、人々の言語的コミュニケーションを達成する言語表象であり、言語は人類の社会文化的な方向への発展過程のベースにあって、その意味で言語使用とは、人類存在の進化の過程を牽引した根源的な力といえよう。

さらに文字言語の開発は、人間の記憶を記録する、時の制約を越えて人間の思考過程を伝えるという、その意味合いは人類の歴史過程に大きな影響を引き興しているといえよう。

※共時変換：通時変換に対して、言語の安定した変換、「一定時期の言語の記述」と見なされている。

※通時変換：ソシュールが生きた 19C に興隆していた比較文法、歴史言語学は当時の進化論の影響のもと、言語の変換、歴史時間の経過の中で、各国言語の変遷の過程、その伝播についてが、言語論における主要なテーマとなっていたという。

その時代の中で、ソシュールにおける通時変換は「ある体系がもう一つの体系を生み出したのではない。体系の中に一つの要素が変えられ、その結果もう一つの体系が生まれたのである⁴」としている。その変化は歴史的産物として共時的な変換に影響を与える関与的变化と、それまでには及ばない、非関与的（通時的）な変化の二つを指摘している。

そして現人類は、音声言語を使用してコミュニケーションを交わすホモ・サピエンスが種の存続を果たし、旧人類等はすべて消滅しており、唯一のヒト属、ホモ・サピエンスである。

4. ここまでの展開の纏・そして問題意識

言語記号論とコミュニケーション関係について

① 言語使用と人間

論点として、あるいは議論のながれとして、以下の4点を挙げておく。

論点1：語彙（シーニョ）の増加の過程

人類の言語は、分節言語であり、話者聴者の互いの意味の擦り合わせ過程において、会話の場の状況・生命維持のためのコミュニケーション等の切迫性の中での、音声言語コミュニケーションを想定するならば、突発的対応関係において、音素の配列関係としての言語音声の揺れは、多々想定され得るであろう。

その揺れは、一つには精神運動の揺れ、その恣意に揺れ動くであろう事、二つには、言語音声表象の線状性からの要請に従いつつの、精神機能の恣意性との干渉関係を負う「揺れ動き」の契機、その二つが想定されよう。

言語音声表象としては、恣意性に対する線状性からの拘束関係を抱えているので、言語音声の揺れをもたらし易く、従って音素配列関係は揺らぎを抱え易い構造であろう。ホモ・サ

⁴ 丸山圭三郎『ソシュールの思想』P112 岩波書店 1989年10月16日

ピエンスの生存過程は、言語的意味（シニフィエ）の増殖・分化の過程を生じせしめる契機としては、多々起こり得るであろうから、人間の言語使用は、音声言語における語彙（シーニョ）の増加を現出せしめる傾向、混乱等を生じつつの言語使用が多々想定されよう。

論点 2. 音声言語の記号的構成と聴覚機能・・無限的な表現、表象の可能性

「シーニョ・言語的意味」の「シニフィアン・音声」について、トルツベツコイが提示した、それ自体は意味を有しない音の単位「音素」の線状的配列関係であり、かつ「シーニョ」の「シニフィエ・意味」とは一体的であり、音の変容は意味の変容をきたす（音と意味の一体性）ので、「シニフィアン・音声」の揺れは、意味の揺れを引き起こす契機であろう。

この契機において、言語的コミュニケーションの中から、人間は「シーニョ」の使用、繰り返しの使用の記憶において、新たな「シーニョ・言語的意味」を言語の体系へと、記録する契機とその経過が想定される。

言語的意味の単位「シーニョ」は、言語使用の渦中であって、音の揺れが意味の揺れを引き起こしつつの、言語的意味の増殖過程を引き起こす事が想定され、この傾向のベースにある性質が、言語音声、「シニフィアン」の記号的構成であろう。

人間の使用するコミュニケーションツールとしての言語、音声言語は、文字言語以前の人間において、精神運動、観念作用の展開過程をなぞるが如く、そしてその動態を、言語の記号的な構成において、無限的に表現、表象する事を可能にする構成として理解されよう。

論点 3. 言語使用における精神活動の重ね合い・・話者/聴者双方のランゲージュ

人間の言語使用は、話者の側のディスクール達成へ向かう発語過程であり、コミュニケーションを行うべく、人間の刻々と動く精神活動の動態（ランゲージュ）を駆動して、音素を基礎的な単位とする記号的構成「シーニョ」の発語、その連鎖を構成する。

それに対して聴者の側は、その意味の理解の達成を可能ならしめる精神機能の動態（ランゲージュ）を発動し、話者の言語音声（シニフィエ）を聞き取りつつ、自身のランゲージュをもってディスクールを構成する。その相互的な意味の理解過程としてのコミュニケーション過程において、双方の動態、活動における焦点は、音声言語における「音」が、言語音声としてどのように、双方において意味を抱えつつ、発声され聴き取られるかであろう。

そこで、音声言語コミュニケーション達成へむけて、話者/聴者双方に同質のラングの体系が想定されねばならない。その構成において、人類の集団的な生活、文化を醸成する経過の中の、人間のコミュニケーションツールとしての言語、「ラングの体系」であり、話者/聴者として、話者/聴者双方、集団構成員、人間集団としての言語使用としての浸透、それが言語の体系の深化拡大の経過をもたらしつつの、人間の音声言語使用、その地質学的歴史時間

の経過が想定されよう。

論点4. ラングの体系と脳機能・・・脳機能の拡大、脳容量の拡大へ

ランゲージ（言語能力）の動態は、精神機能（ディスクールの達成）と、身体運動（発語過程）の重合を不可欠に要請する音声言語使用であり、言語使用の記憶を脳機能へと蓄積しつつの言語の体系の拡大深化の過程を、もたらし活動として理解されよう。

その地質学的な歴史時間の経過において、人間は野生の状態から、社会文化の状態へ、言語使用をエンジンとなして、次第にその方向へと移行を進めた生物種として想定されよう。

言語使用の深化拡大に伴う人間の精神機能の動態、心的動態の展開、それら言語使用の記憶は、脳機能への関与を深化させつつの、人類種の言語的コミュニケーションの歴史時間の経過において、深化拡大が想定されよう。

やがて人間は、コミュニケーション機能としての音声言語の使用の深化拡大と共に、その記憶を脳機能へと刷り込みつつ、脳容量の増大をきたしつつ、ラングの体系の深化へとの流れが想定されよう。

言語の体系は、言語使用の深化拡大の展開において、脳機能に言語使用に係る領域「言語野」を醸成したのであろうが、ホモ・サピエンス、ヒトの生態としての二足歩行、上肢の巧緻化と並行的に進んだ言語使用の拡大であり、ヒトの進化の過程を牽引したところの人間の生態、二足歩行、上肢の動きの巧緻化、言語使用の展開が想定されよう。

5. 言語記号論と人類の歴史

話者/聴者において、生成されつつ、変換されつつの「言語」の体系性、その「体系」のベースにある「構造」と言う概念を示し出したのが、ソシュールの言語論である。そして、言語的意味の単位「シーニョ」は、音素の線状的な配列関係として成立している。

① 音素と音素配列のトレース・記憶

聴者は「シーニョ」の「シニフィアン・音」の構成単位『音素』、その配列関係が齎す聴覚的映像、「音響イメージ」を湧出せしめつつ、聴覚機能と精神機能を重ねて、話者の語る言語的意味理解へ、ディスクールの理解へと至る。

発語側、その精神機能をディスクールの達成へ向けて、妥当な「シーニョ」を選びつつ、その線状的な配列を構成しつつの発語過程をもってディスクールを達成する。

このような言語的コミュニケーションの場を想定するならば、話者/聴者双方のランゲージの重ね合いが想定され、聴者側は話者の発する「シーニョ」を音響イメージとしてうけとりつつ、ディスクールの達成、意味理解へと、ランゲージが発動する。

話者の側は、

言語的コミュニケーションは、言語の「音」の構成、音素の線状的配列構成を、互いにディスクールの達成へと動きあう言語使用が想定される。この展開は、言語音声の記号的構成故の刻々の時の流れに沿いつつ、**発語側**は恣意に彷徨う精神機能の動態に従いつつの発語の過程であり、それを聞き取る**聴取側**は、音響イメージを湧出しつつ、その線状的配列関係を構成しつつの、ランゲージュの発動による意味理解へと至る流れと想定されよう。

記号的構成である言語的意味の単位「シーニョ」は、音素を基礎的単位とする線状的な配列関係であり、その「シーニョ」は音と意味の一体的構成である。そこでその音素の配列関係としての「シーニョ」は、話者・聴者の言語音声の交錯としての言語使用の展開において、線状性と言う時間的な拘束関係において、新しい「シーニョ」への分岐、その方向を引き起こす事を可能ならしめる、双方の音声言語の交錯関係を惹起させるものと想定されよう。

② 記号的構成故の言語の「音」、その「音」と一体的な「意味」

言語的コミュニケーションの過程の人間の精神機能の流れにおいて、「シーニョ」を構成する音素の配列関係（シニフィアン・音）の揺れが想定され、従って「シニフィエ・言語的意味」揺れが想定される。

複数の人間が音声表象を交わす、「会話」的な場面において、話者/聴者等のランゲージュ（言語能力）は、それぞれが線状性と言う時の流れの拘束下にあって、ディスクールの達成へと向かうと想定される。その場での記号的構成の効果として、その場の話者/聴者において、多様にパロールが交錯し合い、音素の配列関係の交錯・交雑が想定されよう。

言語的コミュニケーション過程は、言語音声の単位「音素」の流れ、線状的（一線状）な構成をもつての交錯であり、音素とは何よりもまず「対立的、関係的、そして否定的な本質体（アンテイテ）である⁵。」とされている。

聴者/話者のランゲージュの交錯、あるいは重合状態において、言語の記号的構成故に、「音響イメージ」を背負う音素の線状的な配列関係でありつつ、「二項対立」的構成において「音」と「意味」**双方の近傍性**において揺れつつ、その「分節」の動きを抱えざるを得ない記号的な音の構成であろう。音と一体的な言語的意味の揺れの中で、言語的意味の揺れ、増殖過程が想定されよう。

③ 言語音声を人間の感性はどう捉えるのか？

言語音声「パロール」を構成、発声する話者の側、「パロール」を聞きとり意味理解へ至

⁵ 丸山圭三郎 『ソシュールを読む』 P72 岩波セミナーブックス2 2009年3月13日

る聴者の側、その双方、発語側と聴者側の言語音声を媒介とする意味理解、その経過は記号的構成（音素の配列関係）において、双方の精神機能の駆動、その重合構造をなしつつの人間の言語使用として想定されよう。

そして話者の発語過程（パロール・言語音声発声過程）、発声、発語運動に係る精神活動、そして聴者側の聴覚機能と精神活動による意味理解、その双方の展開は、「シーニョ」の音素の配列関係と言う記号的構成において、シンプルな過程の重ね合わせとして進行する事が想定される。

記号的構成故の思考回路の定型性、習慣性は、母国語集団全体への言語使用を敷衍する事を可能ならしめ、集団性、共通性、情報の質の平準化等を齎すところの意味表象のツールとして機能する事として想定されよう。

④ 意味理解に係る聴覚機能と精神機能の関係、

言語理解に係る人間の精神機能と聴覚機能の動態について、ソシュールは「音素と人間の言語は、何よりもまず対立的、関係的、そして否定的な本質体である⁶」としており、トルベツコイがプラハ学派の中心的存在として、ソシュールの言語論を音韻論に応用する形で研究を進め、音素の概念や音韻的対立の体系化を通じて、その後の音韻論研究の理論的な基礎を提示しているという。

しかし、ヤコブソンが12対と整理している言語音声について、各母国語言語に於ける「シーニョ」を構成する音素について、それぞれの母国語におけるコミュニケーションを進める人々において、その精神機能に響く、あるいは識別される得る音素、音素対（つい）のバリエーション数は、進化の過程により多様であり得るようである。それは母国語言語の多様性を規定しているのであろうが、その議論においてトルベツコイの音素の定義が、その基礎的な単位、音素を示し出した訳である。

そして長き地質時代を経た人間の音声言語使用であり、物理音に対する人間の聴覚による、言語音声の認知形式については、言語音として反応し、区別識別可能な形式と、物理音との関係、人間の言語音把握には一定の習慣性に裏付けられた構成、構造を各母国語言語は有していると理解されよう。

人間の言語音把握に係る聴覚機能の感授性について、詳細構造を抱えつつの、その総合としての音声言語の使用についての議論では、21世紀になり、人類のIT言語等の使用の趨勢において、言語記号論との関係、可能性については、大きな展開をつげつつも、その解明の

⁶ 丸山圭三郎 『ソシュールを読む』 P72 岩波セミナーブックス2 2009年3月13日

途上であろうと思われる。

まとめ

言語の「体系」は恐らくは現生人類の種の特徴として、脳機能と言う臓器（生体機能として）の中、「言語野」とされる部位等に、言語使用に係る機能が抱えられており、それは個体発生において、基礎的なところは既に形質として生成されていると想定されよう。

おそらくは言語の共時態は人類の脳に既に出生時に刻まれている言語の体系としての言語の構造であり、人類の進化の過程を背負った遺伝的性質として想定されよう。それは出生後の、個体としての成長の過程で、しかるべき言語体系による言語音声の刺激を受けて、その個体としての固有な発達をとげつつ、言語使用に、言語能力獲得に及ぶものとして想定されよう。

人類は個人においては、様々な母国語能力として発現せしめる可能性を脳内にかかえつつ誕生し、「言語の体系」をそれぞれの脳機能に生得的に潜在能力として抱えていると想定される。そして人間の個体としては、誕生後の生育の過程で、個々の母国語言語の音声の刺激として受け取る事によって、当該言語へ向けた言語能力の発達をもたらす、言語的コミュニケーションを交わし合う個体として生育すると想定される。

通時態は、誕生後の母国語の刺激により、時代的条件の下で、それぞれ発達をとげた母国語集団における個々の言語使用形態として、個別的、個体的でありうると考えられる。それに対して共時態とされる体系は、その時代の人間が、言語の体系として生得的に保有していると考えられる、いわば普遍言語的な構造を成していると考えられる。

通時態は出生後の言語使用の条件下で、それぞれの母国語言語音声の刺激を受け取る事によって発現する言語使用の様式、母国語言語の体系性と想定されよう。

6. 人間の言語の始まりについて（コミュニケーションの観点から）

① ホモサピエンスの言語と脳機能

猿から人類への進化の過程で、猿人（700－400 万年前・脳容量 400-500ml）とされる集団は、既に樹上生活から地上の生活へと移行を果たしたとされており、樹上生活において上肢と下肢はその機能を歩行と言う共通性から解放され、上肢は手としての機能を獲得しているとされている。やがて 2 足歩行において猿と人間の分化を促しつつ、二足歩行をもって、動物分類学的には猿人を含めてヒト属とされる。

二足歩行という生態は、上肢を手として活用する事に加えて、その姿勢が四つ足の哺乳類とは異なり、頭部、顔面は脊椎の延長上に位置し、頸椎、脊椎の角度、頭部、

顔面と脊髄の接続角度に大きな変化をもたらしている。顔面が進行方向と一致、地表面と垂直となり、脊髄の上部に位置する。

言語表出に及ぶ人間の「差異の感興」は、生活場面、あるいは対象世界に対して、何だかの「差異への感興」に引き続く「音声的表出」、叫び的な発声過程を産みしめる場面として、その精神と身体の協働過程の創発が想定される。その地質学的な時の経過において、生命危機等の生物としての普遍的、共通的な情動において、自己表出でありつつ、その「叫び声」が音声コミュニケーションの先駆と理解され得る、互いの発声過程を引き起こすなどとして、音声言語の先駆状態が想定されよう。

※ホモ＝サピエンスの特徴：化石人類との違いは、一つには額（ひたい）が垂直に近い（他の人類は水平に近い）ことである。これは大脳の前頭葉が大きくなったことを反映していると言う。また、眼窩上隆起が小さくなって消滅し、顎（あご）が小さくなって顔面が平らになり、**頤（おとがい）**が発達したという。

<https://www.num.nagoya->

[u.ac.jp/outline/staff/kadowaki/laboratory/research/human_evolution.html](https://www.num.nagoya-u.ac.jp/outline/staff/kadowaki/laboratory/research/human_evolution.html)

② ホモ・サピエンスの頭部の形態上の変化

そのため、頭部の形態上の変化を促して、口唇、喉の形態の変化、あご（おとがい・頤）の形成、喉、声帯の位置の変化など、多様、複雑な言語音声発語を可能ならしめた、形態の変容が指摘されている。

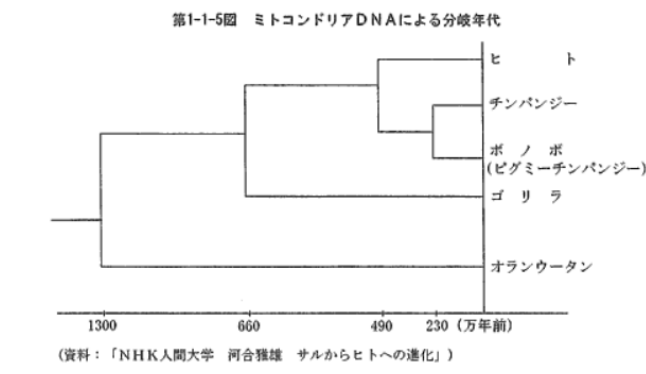
最後の主要な氷河期はほぼ1万年前に終わったとされている。

現生人類は、7万年前ごろに集団生活へ、人類の社会文化性の形成過程へと、世代を重ねつつ、自然生物性から社会文化性への移行を続けたとの想定のようなものである。現在分子遺伝学の発展の中で、化石、人骨からのDNAの解析が始まっており、脳機能に係る遺伝子の新たな発見が報告されている。

③ 音声言語使用の始まりとホモ・サピエンス

1. ヒトの登場とホモ・サピエンス（ホモ・サピエンスへの道のり）

霊長類と類人猿と人類の関係、その分岐した年代は下図で示されている。



ホモ・サピエンス迄の道のり (新しい発見が相次ぎ、塗り替えられつつある)			
猿人 (700-400 万年前)	直立 2 足歩行	脳容量 400~500ml	ルーシーは 318 万年前
原人 (200 万年前~)	〃	700~800ml	北京原人ジャワ原人
旧人 (20 万年前)	〃	1300~1600ml	ネアンデルタール人
新人 (30 万年)	〃	1500ml	クロマニヨン人 現生人類

クロマニヨン人 アフリカで誕生したホモ・サピエンス・大柄で細めとされる。世界に拡散する過程で、ヨーロッパに定着したグループの代表的な存在。

現代人の祖先として現代までつながる系統

ネアンデルタール人 身体的特徴: ネアンデルタール人はよりほっそりした体つきで、現代人に近い特徴を持ちます。柔軟な雑食と大きな集団生活、芸術活動（洞窟壁画など）が特徴

ホモ・サピエンス (Homo sapiens) :

現生人類は生物学的には動物界・脊椎動物門・哺乳綱・霊長目・ヒト科・ヒト属に属する種で、「賢い人間」を意味するラテン語の言葉。霊長類サル目のヒト科には、チンパンジー、ゴリラ、オランウータンなどが属し、ヒト属は現生人類が唯一の種である。

この猿人等の区分けは、最近の分子遺伝学の展開の中で、「旧人とされていたネアンデルタール人とホモサピエンスは、共存していた時期がありネアンデルタール人が 3 万 5 千年頃までに絶滅したと言う説が、分子遺伝学の近時の展開の中で有力になっている。」

(しかし新しい発見が相次ぎ、書き換えられる時代を迎えている。)

④ **ホモ・サピエンスの言語の特徴：二重分節**

人間の言語の特徴として、フランスの言語学者**アンドレ・マルティネ**提唱の、「**二重分節**」が指摘されている。前述のように言語の性質は意味を有さない（音素）の配列関係により言語的意味の単位（シーニョ）が構成されていて、その音素が一線をなして（線状的に）配列されつつ、互いの配列の差異により、言語的意味とリンクして意味を生成する。

人間の使用する言語の体系は、互いに近傍的な言語的意味との間の差異によって、その「差異の二項対立関係」から、無限の言語的意味を括り出し、新たな「シーニョ・言語的意味」の生成を可能ならしめるという、人間に特徴的な言語使用の世界を切り開いたとされる。

※二重分節：文が意味を持つ最小単位（形態素・語）に分けられ（第一次分節）、さらにその意味を持つ単位が意味を持たない音の最小単位（音素）に分けられる（第二次分節）という、人間言語特有の二段階の構造を指していて、この性質により、言語は有限の音素から無限の言葉を生み出すことが可能になり、言語の経済性と創造性を両立させているという特徴を有する。（フランスの言語学者[アンドレ・マルティネ](#)の 1950 年代以降の提唱）

⑤ ホモ・サピエンスとネアンデルター人の喉の構造

言語の発音、発声の過程について、人間はサル類が持つ複雑な「声帯膜」を失い、ヒトの声帯が単純な構造になったことで、安定した複雑な音声言語（話し言葉）の発達を可能にした、という点が最新の研究で明らかにされたという。

声帯を抱える喉の構造としては、「おとがい・頤」のあるホモ・サピエンスの喉頭蓋が、肺に至る空気の流れと呼吸時の空気の流れを区分けする構造になっていて、音声言語の発声機序を可能ならしめている、とされる。

※「サル類は大きな声や多様な鳴き声を出せますが、声帯膜の相互作用で振動が乱れやすく不安定なのに対し、ヒトの単純な声帯は、脳による随意的な制御と組み合わせることで、連続した音素（母音・子音）を安定して発声し、高度な言語コミュニケーションの基盤となりました。」 AI 検索

※オトガイ（頤）：下顎骨（したあごの骨）の先端部分を指す医学用語で、一般的に「あご先」や「あご」と呼ばれる部分。口を閉じたり下唇を動かしたりする筋肉（オトガイ筋）が付着しており、顔の輪郭形成において重要な役割を持ち、ヒトに特有の部位である。（この部位は、発声において、下顎を上下に動かしたり口の開き具合を調整したりすることで、母音や子音の響きを分ける重要な役割を担っています。）

また、「オトガイ舌骨筋は発声にも関与しています。舌骨の位置が声帯の調整に影響を与えるため、オトガイ舌骨筋が適切に機能することで、発声の安定性が保たれます。例えば、発声時に舌骨が前方に引き上げられることで、声帯の緊張や振動が適切に調整され、クリアで安定した声を出すことができます。」

⑥ ホモ・サピエンスの「おとがい・頤」

「おとがい・頤」が生成へ向かい、喉と下あご、「おとがい・頤」の立体構造に変化をきたした現生人類の音声言語の表象は、複雑な 12 対ともされる多様な音素配列の差異を表象

しうるとして、その人間の音声言語表象を、可能にする発声機能、部位として、身体構造としての「おとがい・頤」と理解されよう。

言語音声による発語過程を通して実現するのが音声言語コミュニケーション能力であり、ホモ・サピエンスのネアンデルタール人との差異について、発語に係る身体的（発声機能）条件、喉と舌の構造と動きにおいて、音声言語表象における劣勢があれば、集団生活の遂行においても、次第に優勢/劣勢の関係を生じた可能性が有り得るであろう。

ネアンデルタール人はホモ・サピエンスと比べて、脳容量的には劣勢は認められないのだが（前者は 1300－1600ml に対して後者は 1500ml）、言語音発声の機序に係る部位の解剖学的な「喉」、舌の構造、「おとがい・頤」の形態上の相違は、言語音発声・発音のバリエーション等に、違いを生じせしめるであろう。

その違いが、音声言語コミュニケーションの質に影響を及ぼし、それがネアンデルター人とホモ・サピエンスの共生関係において、言語的意味の多様なバリエーションを表現し、意味につなげつつの言語使用能力の差異、劣勢として、ホモ・サピエンスと他のヒト属、ネアンデルター人との間で、食料調達等の場面でその劣勢が次第に拡大せざるを得なかったとの想定がありえよう。

⑦ ホモ・サピエンスとネアンデルター人のコミュニケーションの位相

そこでホモ・サピエンスは、ネアンデルタール人との関係において、複雑な言語音声をもつてのコミュニケーションの質を拡大しつつ、その効果として集団生活の規模を拡大し、共同作業を拡大しつつの生活へと移行したとの想定が可能になるであろう。（現在ではトルツベツコイの音素の定義において 12 対の音素の配列関係を構成するという説は否定されていない）

時は氷河期でもあり、互いに過酷な自然条件、生存条件の中の生活、生命維持のための切迫した場面に立たされる場面も想定されよう。

旧人とされるネアンデルタール人とホモ・サピエンスの間は、数万年単位の長い間、共生関係にあった可能性があり、現在の人間の DNA の解析から、ネアンデルタール人由来の部分が証明されている。この事実は、ホモ・サピエンスとネアンデルタール人は、互いに家族関係をなしつつの歴史過程を共にしている経過を有すると理解されよう。ホモ・サピエンスは脳容量は 1500ml とされ、ネアンデルタール人の脳容量は同程度（脳容量（1300～1600ml）とされており、この点ではいわゆる旧人も新人も遜色は無く同容量のようである。

しかし、ネアンデルタール人に言語音声表象、発語において、ホモ・サピエンスと比較す

れば、言語音声の発音に係る身体機能、のどの形態進化の相違が認められ、言語表象上の劣勢が想定されよう。さらには、その違い、差異が双方の共生関係の終焉等を齎した可能性も想定され得るのではないだろうか。（音声言語の始まりは5万～3万年前頃と想定されている）

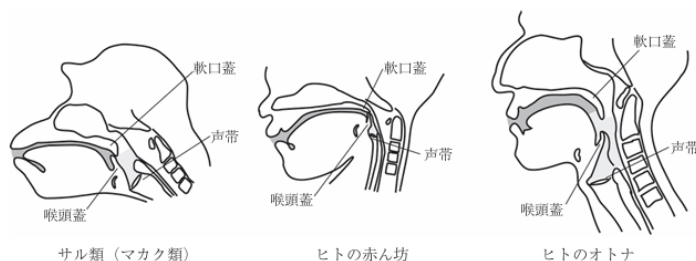


図3 サル類とヒト新生児、成人の声道形状
濃灰色は口腔、薄灰色は咽頭腔¹⁰⁾。

⑧ 「おとがい・頤」の生成による言語音声への影響

ネアンデルタール人の音声言語によるコミュニケーション能力の推定について

（キーワード：集団的な言語使用 母国語言語 恣意性と線状性 重ね合い）

旧人として分類されているネアンデルタール人と、ホモ・サピエンスとの違いについて以下の3点を指摘する説も提示されている。

- ① 武器のイノベーションもネアンデルタール人はサピエンスに劣っていた。
- ② ネアンデルタールの集団はサピエンスと比べると少人数だった。
- ③ ネアンデルタール人の遺跡には、絵画や装飾がなく言語能力が発達していなかった。

おそらくは現在の言語論において、トルベツコイが『音韻論』において指摘する「12対の音素の線状的配列関係」の構成を、発語する能力について、また聞き分ける能力について、アンデルター人とホモ・サピエンスとの違い、差異が想定され得るであろうか。

言語音の発語・発声に係わって、ホモ・サピエンスの「おとがい・頤」の構成は「ネアンデルター人とくらべると、（話し言葉）の使用において、その発声可能な音素の組み合わせにおいて、ホモ・サピエンスの優勢をもたらした可能性が想定されよう。（脳容量においては、ネアンデルター人が（1300-1600ml）であり、ホモ・サピエンスは1500mlとされていて、ネアンデルタール人に明白な劣勢は認められない）

⑨ 「おとがい・頤」への進化を獲得した人類種としてのホモサピエンスについて

1. 「シーニョ」は（形態素）であり、更にその「シーニョ」は「音素」の線状的配列関係であり、それを組み合わせて文章を構成する事は統語とされる。この二重の構造（二重分節）を持つ点が人間の言語の最大の特徴とされ、二重分節の言語を発音して、日常的に

使用するホモ・サピエンスの音声言語コミュニケーション能力であり、発語に係る身体運動において、ネアンデルター人との間で優劣が存在したと推定され得るのではないだろうか。

2. ヤコブソンが12対として提示した音素、その線状的な配列関係である「シーニョ」を構成、その「シーニョ」がディスクールを達成すると言う、音声言語を使用する話者/聴者の互いの関係において、「おとがい・頤」への進化を獲得した側の人類は、音声言語表象の深化拡大に伴い精神機能の深化拡大を進め、ホモ・サピエンスが人間社会の拡大への歴史的経過、展開過程を齎したものと想定されよう。

人間は脳容量の増大へと至り、いわゆる旧人であっても、1300 から 1600ml の脳容量であり、ホモ・サピエンスとほぼ同じ脳容量である。しかし音声言語の複雑な音素の配列関係を構成して、意味（シーニョ）へと繋ぐ、発語発声運動において、ホモ・サピエンス以外のヒトとの間に、顎の形成に係り、ホモ・サピエンスの優位性が生じた可能性が想定され得よう。

3. トルベツコイの『音韻論』が明らかにした12対とされる数の音素の配列関係を構成する、言語音声表象である。言語使用において、発語運動を実行する、発声の機序を踏むという、身体運動の遂行課程を考えると、言語音声の発声過程において、複雑な音素配列関係を進める言語音の発声においては、ネアンデルタール人において言語音の発声を想定するならば、ホモ・サピエンスに対して劣勢となり、言語的コミュニケーションの水準に差異が生じ、社会生活の場面で差異を生じる可能性は否定できないと想定されよう。

4. 他のヒト属の絶滅の中で、ホモ・サピエンスはその人口規模を拡大し、5万年前頃と想定されている、いわゆる「出エジプト」を経て、世界中に広がったとされる。音声言語表象におけるコミュニケーションの水準の「差異」、音素の線状的配列関係の構成を発語するにあたって、「差異」劣勢を生じせしめる事が想定されよう。たとえば、協働作業の遂行において、家族間のコミュニケーションにおいて、ネアンデルタール人に劣性が現出せざるを得ないと考えられよう。

5. 二足歩行をするヒト族において、顔面は「おとがい・頤」の生成への進化、あるいは形態の変化の経過が認められる。その「おとがい・頤」の生成による発語発声機能の進化（5万年～4万年前の出来事）をもって、ホモ・サピエンスにおいて、他のヒト属との間で、そのコミュニケーションの水準の差異において、集団の規模を拡大し、氷河期を越えての生存を、唯一果たし得た人類種として想定され得るのではないだろうか。

6. 音声言語の表現の幅を広げたであろう、音声表象に係る発声機能の向上、「おとが

い・頤」に係る発声機能の水準であろうか。音素配列を成しつつの言語音表象過程において、言語的コミュニケーション活動の拡大深化を引き起こし、それがより大きな規模の集団生活へと、人間の社会文化性を進化拡大をもたらしたと想定する事もできよう。

人間の特有の能力としての音声言語使用によるコミュニケーション能力の拡大は、ホモ・サピエンスにおいて、唯一「種の継続」を果たし得たヒト族として生存を続けせしめ、その後の経過としては、集団生活の規模を拡大せしめつつ、社会文化性を進化拡大へと、文明の構築を果たし得た要因であろうか。複雑な音素配列関係の発語、発音を伴う言語使用の展開、その歴史的な展開過程であろう。

（可能性として）

言語の構造と体系に関連して、言語の構造に対して言語の体系について、ソシユールは共時変換を対象とする言語の構造を問題にすべきとしているように、言語の体系は歴史時間の経過において消えゆく言語使用の形式とされているのであろう。

私の推論としては、神経系統、神経繊維集合としての脳機能であろうから、ある「シーニョ」をインプットする場面で、脊椎動物の脳反射の機序を追いつつの動態、定型的な動態の集合としての言語の体系性が想定されよう。そして突発的な事象への反応等の動きなどにおいて、母国語集団としての反応のさまざまが有り得るだろうから、それらの記憶としての、脳機能へのインプットは、いわば非定型的にあり得るであろう。

あるいは、哺乳類動物の神経組織の刺激に対応する反応形式、その定型的な機序に対して、非定形的な突発的な事象の記憶の刷り込み、その双方の総合としての言語の構造であり、しかし通時・共時を含みつつ使用される実際の言語の体系においては、やがて消えゆくスタイルの言語使用も行われつつの経過も想定されよう。

7. 2025 年の現在 700 万年前から二足歩行を開始したとされるヒト族の分化の過程、歴史的経過に於いて、ホモ・サピエンスの進化の過程について、分子遺伝学の進展の中で様々な学説が書き換えられつつある時代を迎えている。その中で下記の発見である。

2017 年 6 月 8 日、アフリカ北部モロッコでの発見

※「ホモ・サピエンスと思われる最も古い骨は、ライプチヒ・マックスプランク人類進化研究所の研究者たちによりモロッコ Irhoud から発見され、31 万年前の骨と特定された (Hublin et al. *Nature* 546:289, 2017)。この発見により約 70 万年前にネアンデルタール人からアフリカで分離したサピエンスが、南、東アフリカだけでなく、モロッコの位置する地中海の西の端までアフリカ中に広く分布していたことが初めて確認された。すなわち、人口が増え、繁栄を遂げていたと思われる」

※「アフリカ北部モロッコで、約 30 万年前のものとみられる初期の現生人類ホモ・サピエンスの骨が発見され、ホモ・サピエンスはアフリカ全土広がっていたことが証明され、ホモ・サピエンスの生活地域、時期ともに（定説が）大幅に広げられている。」

私の解釈：発語機能（身体運動）と精神機能の重合状態を想定せざるを得ない発語過程、そして聴覚機能と精神機能の連動状態を想定せざるを得ない聴者の言語的意理解、聴者/話者双方のランゲージュの重ね合い、精神機能の重ね合いが、言語的コミュニケーションにおいて必須な条件として想定されるであろう。

集団内の構成員において、音声言語によるコミュニケーション、音声言語の使用が行われ、その地質学的な歴史時間の経過において、人々のランゲージュ（言語能力）の醸成過程は浸透しつつ、それが言語を使用する人類種の生態として、互いの言語使用の交錯関係、聞き取りつつ語りつつの言語使用を、生命活動の重要な部分として醸成したと想定される。

音声言語による人間のコミュニケーションの在り様、その深まりは、人間の相互関係をつないで生存する生態として定着し、食糧調達等の場面において、展開していったものと想定される。人間の脳容量の増量は、音声言語使用の記憶、頻繁に使用する音声言語の単語、あるいは「シーニョ・言語的意味」の記憶として、脳機能に input しつつ、言語の体系の醸成過程としての、集団の個々において連動過程が想定されよう。

音声言語を表象する発声・発音については、12 対とされる音声言語音素の線状的配列関係をなぞり得る構造が必要になるところから、巧緻な発語のための発声器官としての、喉の構造が必要であろうと思われ、喉の構造とともに、舌の動きの関与において、言語音声の音素配列関係を音響として差異をもって表出する事も想定され、「おとがい・頤」の発達、舌の運動等の複雑な動きが、12 対ともされる音素の各配列関係を達成する為に必要な条件になり得るとも考えられよう。

「おとがい・頤」の形成・進化の過程が、音声言語の複雑な音素配列を表象するために、必要条件として機能したのではないだろうか。そのコミュニケーション能力の差異が、ホモ・サピエンスの他のヒト族との社会構成上の基本的なコミュニケーション能力の差異として、その優位性が過酷な氷河期の種の存続に影響があり、ホモ・サピエンスが種族を保存して現在の繁栄を可能にしたのではないだろうか？

人間のコミュニケーション能力は、音声言語の始まりと共に、精神機能を様々に揺らしながら、互いの協働過程を深化拡大せしめ、生存競争においての優位性を齎したのではないだろうか。

いわば進化の過程において、話者/聴者は互いの言語能力の重ね合い、パロールを聞き合い、話者/聴者の枠を超えて、協働作業等、食料を確保するなどの場面で、集団的な音声言

語による意思疎通をもって、人間の発語過程、音声言語の共有過程を成立せしめ、話者であり、聴者である人類種として、言語能力を醸成せしめたと想定されよう。

パロールを繰るランガーシュの重ね合い、パロールを発し、聞き合うランガーシュの重ね合い関係が、人類集団として、種としての人類の音声言語能力の醸成へ、そしてその中で、言語発声について12対ともされる音素の配列関係をもってする、意味表象の細密化、深化拡大過程が「おとがい・頤」への進化過程を伴いつつ、ホモ・サピエンスの繁栄を可能にしたのではないだろうか？

(以上)